『自分が一番よく知つて居る人』(二)

Mrs. F. H. Burnett. "The one I know the best of all."

東京女子高等師範學校教授　岡田　みつ

六、始めての本。

書物を相手に育つた人間には、自分の初めて持つた書物といふものに懷しさを感ずるものであるが、小さい人には「花の本」といふのが初めての本であつた。實際は「いろは」を敎へる爲の本なのであつたが、此本ほどに御話が入つて居て、先が氣遣はれて、而して美しくて、何ともいへぬ魔力のある本は無かつた。其本がもう奇麗で！腰掛に坐つて何時間でもページを繰つては、「り」は林檎の「り」、「な」は撫子の「な」、「す」はすみれの「す」といふのを見ては其美に打たれ、其不可思議に感動したものである。それが横長い本で、活字が大きく明瞭で、而して一ページが上下二段に區劃が附いてゐて、上段は長方形の黑地でそこに花の畫があると、下の段には其花の名の頭字で始まつてゐる四行の歌が書いてあつた。その黑い地がよい思ひ付きで花が非常に美しく見えた。その歌の文句は記憶がないが、何でもそれ〴〵花に緣のある敎へ草が書いてあつたと思はれる。小さい人が幼い時分には、修身といふ事は忽にされなかつたもので、方正の人は罌粟には必らず華美〳〵しいといふ前置きをし、菫には謹しみ深といふ意味を添へ、薔薇には香氣の美いといふ事を決して忘れずに附けた。小さい人は、花の諸德を忌み嫌ふ

念は毛頭なくて、花はさうしたものと觀念してゐたものゝ、黑地に華やかに出てゐる花の畫そのものゝ方をどんなにか好きであつた。「花の本」が現はれて以來、小さい人は本を所有してそれを讀みたいとの願ひが心に萠した。幸にも小さい人には理想的の好祖母があつた。此祖母さまは欲しいといふものを下すつて、而して思ひやりがあるので物ねだりをするのに都合がよかつた。小さい人が本を欲しがるのが祖母樣には面白くも亦不思議でもあつたのであらう、本よりも人形の方がよくはないかと仰つたのだが、小さい人は本でなければ滿足が出來ぬと頑として言ひ張つた。そこで小さい人は本屋へ連れられていつた。田舍路めいた處にある店であつたが、小さい人は戸外に待たされて居たのであろう、店の內部の事は記憶になくて飾り窓の玩具やガラス瓶の中の菓子の事を覺えてゐる。この店で花の本を購つてもらつて、小さい人は其を自分の腕に抱へて歸つたに相違ないが、さてその本は其後何處へどう紛失つてしまつたやら分らぬ。

七、御話と人形。

小さい人は御話をあんまり語り聞かされなかつた方で、乳母から何とかして御話の委しいところを聞きたいと、無性に骨を折つたことを覺えてゐる。その乳母が面白味のない人間で、其茫然した愚鈍な顏を見ると、よく自烈たく思つたものだ。意味のあり氣な唄を乳母は二行位しか知らないくせに、その續きを知らうともせず、又その話の筋を探り出さうともしないやうな人故、いくら小さい人がその膝に凭れて、その澄した顏を眺め入つて、くどく尋ねても委しい事を引出すことが出來なかつた。

その歌はとぎれてゐたのだが非常に意味が深く思はれて、

君知らずやアリスをば
光澤ある髪の茶色なる
やさしのアリスを知らずとや

と節哀れに歌はれると、茶褐色の髪をしてゐる可憐の小女が目前にうかぶ。そのアリスを何故だか人が哀れがつて而して男の子供が山麓の學校へゆくやうな意味の處があつて、その先に

小暗き蔭に唯一人
御歌の石のそ下に
やさしのアリスは眠るなり

といふ句があつた。その意味が悟れるやうになつてからは、聞くごとに胸が張り裂けるやうに哀れに思はれて、

「何故アリスはそんな處に居るの。どうして石の下に居るの。と尋ねると、

「死んだから其處に埋られたので御座いませう。

と乳母は卒氣なくいふ。

「やさしのアリスが？髪の茶色のアリスが？何故死んだの？何だつて死んだの？

「存じませんヨ。

「でもその先を聞かせておくれ。もつと歌つてごらんよ。

「もう存じませんの。

「その學校の先生はそれからどうしたの？

「どうしましたか歌に入つて居りませんもの。

「その先生ッて恐いの？

「其も歌に何とも御座いませんヨ。

「やさしのアリスはその先生の學校へいつたの？

「そうで御座いませうヨ。

「アリスが死んだ時に先生は可哀さうだと思つたかネー

「其も歌に御座いません。

「そのあとの文句はないの？

「覺えて居りません。

問ひ尋ねても無益であつた。乳母は其以上は知らず又知らうともせぬ。かうか、あゝかといろ〳〵糸口を引出さうとしても、乳母は想像力がないから仕様がない、小さい人はもの欲しさうな眼で、乳母の愚かしい顔を打守るのみであつた。乳母の方にとつては、小さい人が途切れた歌を繰りかへし歌へ〳〵とせがんでは歌はせて、その末にきつと新奇の質問をもち出すので、さぞ迷惑に思つたらうと想像される。

其から人形であるが、小さい人にはお伽噺や、小説や、悲劇や冒險談などで想像力が盛に刺戟を受けるやうになつて、始めて人形が此上もない面白いものとして現はれ出たのである。小さい人にとつては、人形は人形でなく、出來事の主人公なのであつた。妹たちが人形を飾つて玩具の御茶道具で飯事をして、訪問をしたりされたりして遊んでゐると、小さな人は恐ろしい話を小聲で語りながら人形と一所にそれを演ずるのであつた。而して自分は種々の役をするが主人公は人形が必らず勤めるので、或は英雄となり、惡漢となり、或は泣き崩れたる女官となり、慈仁なる老紳士となつた。而して臺詞は他人の聽くことを恐れて聲低くのべるのであつた。他の人は小さい人が獨語つ癖があるとて、可笑しがつて、下女などは戸の蔭に立ち聞きしてクス〳〵笑ふし、兄達は愚かしい奴位に思つてゐた。

宅の玄關へ入つた處に階段があつて、其の側に背の高い燭臺が立つてゐたが、或る日小さい人の母親が何氣なく階段を下りて來ると、小さい人が怒り猛つて何事かを言ひながら、玩具の鞭を上げて、丁々と眞黑のゴム人形を打擲して居た。而してその人形は燭臺の足に縛り付けてあつた。

「マー〳〵何をしてゐるの。」と母親は驚いて云ふと、小さい人は飛びすさつて、鞭を振つて居た腕

を下ろして。骨折りで顔は既に眞紅になつてゐたのであるが、極り悪るさに更にも赤くなりさうであつた。

「唯遊んでゐるの。」と口籠ると

「遊んでゐるの？何をしてゐる處なの？」

小さい人は首を垂れて甚く恥らつた風情で、

「唯ネ、ある事の眞似をしてゐるの。」と答へた。

小さい人が人形を捨てる年頃になつて、母親が此事を語り出すと、あの時は「トム叔父さん」といふ小説の中で、トムといふ黑奴がレグリーといふ邪慳の主人に打擲される處をしてゐたのであると打明けて語つた。

子供部室にある綠色の長椅子こそ、小さい人の唯一の道具立で見かけは古びたゴツ〳〵した坐りたくも思はれない椅子であつて兩端に肘掛が付いてゐたのであるが、其肘掛が立所にして磨墨ともいふべき軍馬になり、又雪を欺く駒ともなり、跳り狂ふこともあれば、蹄が砂を蹴つて飛ぶ事にもなつた。家の内の薄暗い廊下は度々牢獄となつて其處で貴人が囚はれの不遇を嬴ち、臺所が饗宴の席となつて、山海の珍味が盛つてある卓を圍んで古風の文句で主客が打ち興じたりする事になつた又居間にあるテーブルには床まで下がる程の長いテーブル掛がかけてあつて、その下へ潜ると世間から全く離れてしまふので、屢々此處で人形を相手に自分の創造した別天地に住んでゐたのである後年になつてこそ、小さい人は大人がその部室に入つて來て、テーブル掛の下蔭で何か小聲でヒソ〳〵言つてゐるのを聞いて、何と思つたことだらうと考へたが、當時は全く夢中で人の來往なにか殆んど心付かなかつたのである。

八、不可思議の事。

誰でも子供の時の事を回顧すると友達であつた子供の中で、何か特徴のあつた子供だけがはつき

りと記憶に殘つて居るものである。小さい人の心にはある男兒の事が深く印象した居た。その子は怜悧でもなく、可愛氣もなかつたが、氣の小さい柔順しい、自然優しくしてやりたくなるやうな性の子であつた。可弱さうな子だと人が評をしてゐたが、小さい人には可弱いといふ事の意味が分らぬので、妙で而して悲し氣なといふ心持にとつてゐた。その子は細つこい、目に立たぬ子で、丸ぽちやの紅頰の子供達の中では、殊に頰や唇の紫色をしてゐるのか際立つて見えた。

「アルフヒーの唇は變な色ネ。」

「妙ネ！頰も青い。」

などと語り合つた。すると物知り振つた子が、

「心臟が惡いのですつて！先生がさう仰つたの。急に死ぬかも知れないのですつて。」といふ。さうすると誰かが急死する人の話を爲出して、聞いてゐる一同は恐氣が差して來た。併し自分等はまさか死ぬとは思はなかつた。死ぬのは老人か猩紅熱に罹つた人なので、子供部室だの學校だのに死ぬなんといふ事が起れば、あんまり不似合であると思つた。

小さい人は、青い唇の子が、死ぬかも知れぬと云ふ事をよく〳〵考へて見て妙な氣になつて、何故とも云はずに、その子に石筆の新しいのを與へた。而して先方が見てゐぬ時に、課業の事も忘れてその子を眺めてゐた。

或朝仲間の一人が、

「アルフヒーの事を聞いて？」といふ。

「イーエ、アルフヒーがどうしたの？」

「死んだの！昨日學校へ來なかつたでせう。而して今朝死んだのですつて。」

死といふ妙なものが、教室へ入り込んで來たのである。而してアルフヒーの處へ來たのである。あの平凡な顏をしたあの子の處へ來たのだ。しかし

アルフヒーは纖細で人と異つてゐたからなので、まさの他の子の處へは來はしまいと思つた。年嵩の生徒等はもつと委しい事が知りたくて、どういふ風に死んだか、何か言つて死んだか、御話の本には小年小女が敎へになる事を遺言して死ぬからアルフヒーは如何であつたかしらむといつてゐた誰も委しくは知らないのでいくら話し合つて見ても分らぬ事はやはり分らぬので、仕舞に、アルフヒーの宅へいつて遇はせてもらふやうに賴まうと子供の中の實際家が言ひ出した。小さい人は恐れた。行つては惡かろう。家人が遇はせたくなく思ふかもしれぬと言つては見たが結局は行つたのである。

小さな、陰氣な裝飾のない、もの淋しい室の內に、壁に近く長椅子があつて、其上に白布の被つてゐるものがあつた。それが見に來たものであつた。四邊の氣色があの身にそはぬ着物を着た、美しい處のない、蒼白い顏をしたあの子に相應してゐるやうや心地がした。傍に居つた人が白布を取り除いてくれたので、小さい人は始めて死といふ不可思議のものに接した。連れの小女が其に觸れて見よと囁いた。他の子が皆手を出して觸れたから其が禮儀かも知れないが、小さい人は恐ろしくて出來なかつた。しかし「死の如く冷い」といふ文句をよく聞いてゐるので、どんなものか經驗したくもあつて、終に手を伸してその頰に觸れた。思つた程に冷やかではなかつた。しかし氷や雪の冷たさとも亦違つて、柔味のある冷たさで、しかも永劫晴まる時期の來ない冷たさだと思つた。而してその部室を出たあとには柔味のある冷たさといふ感覺と、不可思議を見たとの念とが殘つてゐた。

さて不可思議を自分は見た。友達も見た。その硬直を眺めその寒冷にも接した。不可思議は自分達の眞中へ入つて來たが、自分等には來ぬものと

思つた。誰も口へ出してさうは言はなかつたが、確にそれと信じて安心してゐた。

九、婚禮。

年若の婦人といふものは、奇妙な偉らいものと子供心には見えた。奇麗な衣裳に、花や何かで飾つてある帽子を被つて、時計や鎖をつけて教會へ出掛けたり、舞踏會へいつたりする。その舞踏會といふものが、どんなものか知らぬが、立派な華やかな會で、男の人が薄衣を着た婦人とダンスをしたり、實のある、上品な光り輝くやうな御話をするものらしかつた。

小さい人の通つてゐた學校の先生は、二人とも年若の婦人であつたが、誰も若い人だなゝ思はなかつた。權威、智識、經驗の權化たる先生を、どうして取るにも足らぬ若年輩と混同する事が出來やう。一人の先生は年齢二十三でもう一人が二十四才でゃもあつたろうが、自分等の母親位の年輩の人と思つてゐた。或る日小女等が先生の年齢についてあれこれと話してゐた處を、先生が聞いて、

「私をいくつだと思ひますか」と目に笑を帶びて傍の小女に尋ねた。小さい人は不圖、うちの母樣よりは若いかも知れぬとの念を起こした。しかし尋ねられた生徒は、

「さうネ、知りませんけれど……まあ……さうネ四十位？」といつた。

この先生の御友達か所謂若婦人であるのが不思議で、この人達は茶話會の席で談話をするのに「英國の最初の王は誰ですか」とか「ウラル山は何處にありますか」とか「マクレスフヒールドは何で有名ですか」など、云ふだろうか。まさかとは思ふが、さて他に談話の材料はありそうにも見えなかつたところが、或時小さい人は、先生が舞蹈會に着るのだといふ薄桃色の着物を見せてもらつて大に悟

つた。仲善の友達が先生の妹だつたので、その子が云ふには、

「アノネ明き部室に薄桃色の着物が出してあるの。夜會は今夜なのでもう着るばかりになつてゐるの。姉樣があなたに見せてもよいと仰るといゝが。」

四十位と思はれた先生がその姉さんなので、着物を見ても可いとの許可がその人から出た。明き部室へゆくと、二つ薄桃色の着物があつてフハ〳〵した飾が付いてゐて、華麗きはまるものであつたこんな着物を着て、男の人とダンスをしながら「五十七から十五を減じていくつになりますか」などゝいはれるものか。決していはれはせぬと知つた。

この先生達の從姉妹が二人同時に結婚式を擧げるといふので、その噂が學校内に立つと、一同大層面白い事に思つた。小女には一人として婚禮の式に列したものがないので、儀式についてあゝだかうだとヒソ〳〵語り合つたが、先生もやかましく咎めもなさらなかつた。何でも若い女の人が、特に美しい白き着物を着て、密柑の花をかざして白いベールをして、男の人に伴はれるものゝ由であつた。御嫁さんは美しいのと尋ねる人は多いが花聟に對しては誰も興味を持たなかつた。誰小さい人は花聟を不思議の人物と興がつて、小說中の人物をあてはめて想像をしてゐた。

婚禮の當日は先生が二人とも花嫁の附添になるので、學校は休業であつた。小さい人も友達と一所に敎會へその式を見に出かけていつた。關係者の馬車が來るまでは、誰も敎會の中へ入ろうともせぬので、小さい人も戸外に待つてゐる。而して待つた〳〵末にやつと鐘が鳴り初めた。大きく、快く、勇ましく心が醉はされるやうな音で鳴るので、思はず鐘樓を見上げると、青空が目に入つた。まあ何といふみどり深い空だろう！あの白い

雲のフワ〳〵してゐること！日の當る御嫁さんは幸福だといふが、幸福でない御嫁さんがあらうか！

馬車がやつて來た。人々は見たがつて大骨折をしてゐた。小さい人には白い衣ものと、花と、あでやかな色彩と、黑き衣物とだけが目に映じた。教會の中へ曳かれて入つたか、押されて入つたか覺えもなくて、小さい人はいつの間にか高い腰掛にかけてゐた。式は始まつた。しかし細かい點は分らなかつた。何でもフハ〳〵した白衣、垂れてゐるベール、花、などが祭壇の前に集まると、牧師が恐ろしげな事をいつて誡めてゐるらしかつた。それもやがて濟むと、その一群は別室に退いたすると會衆の中が急に騷然となつて、小さい人は又押されて、曳かれて外へ出て、嬉しさうな鐘の音を耳にした。戸外もなか〳〵賑はしくて、巡査が見物人を制する程であつた。待つてゐた馬車には再び白衣、ベール、花、黑衣、天鵞絨、繻子がそれ〳〵乘り込んで去つてしまつた。鐘はます〳〵やかましく鳴りとゞろき、日光はなほ〳〵キラキラ照つて、四邊が唯々美しくあつた。

柿

師の坊は山へ童子は柿の木へ　（一茶）
澁いとこ母が喰ひけり山の柿　（同）
京の兒柿の澁さをかくしけり　（同）

菊

小ぶりなは小僧が鉢や菊の花　（同）
鍬の柄に小僧の名あり菊の花　（同）